

博士論文（要約）

尊敬関連感情の生起要因と社会的機能の検討
—現代日本の大学生を主たる対象として—

武藤 世良

本稿は、古来、様々な社会・文化において重要な概念とされてきた尊敬 (respect) が、特に日本文化においては日々、頻繁に経験される「最頻的感情 (modal emotions)」の一種である可能性を指摘した。そして、尊敬に関わる一群の「尊敬関連感情」の概念整理を行った上で、その生起要因や社会的機能を、現代日本の大学生を主たる対象として検討した。

第 I 部 (第 1 章) ではこれまで心理学が尊敬という心的現象をどのように捉えてきたのかを概観し、尊敬には大きく分けて「義務尊敬 (尊重)・「感情的態度尊敬」・「感情状態尊敬」という密接に絡み合う三つのモードがあると論じた。義務尊敬は、他者への道徳的義務であり、実際の気持ちが伴うか否かに関わらず、相手にわかるように「示す」ことに焦点がある。一方で、感情的態度尊敬と感情状態尊敬は、前者は特定の関係性において一貫して保持され、後者は一過性の反応であるという違いはあるものの、どちらも優れた他者に対して心からその気持ちを「感じる」ことに焦点がある。本稿では、感情モードの尊敬 (感情的態度尊敬と感情状態尊敬) に目を向け、その社会的機能の一つとして、特に Li & Fischer (2007) の「自己ピグマリオン過程 (self-Pygmalion process)」仮説に着目した。この仮説では、優れた他者への感情尊敬 (affect-respect) に、相手を役割モデルに据えた追従を促し、ゆくゆくは自身その人のようになることを可能ならしめる、という自己の発達にとって重要な機能を仮定しているが、実証的検討はほぼなされていない。さらに、近年、欧米圏ではこうした優れた他者へのポジティブ感情は、主に「他者称賛感情 (other-praising emotions)」として急速に研究が展開されているものの、多くは admiration (称賛) や awe (畏敬) といった異なる感情ラベルで検討され、respect (尊敬) そのものの研究は不足している。

これら先行研究の問題点に対して本稿は、感情の概念化には広範な文化差があることを強調した。そして、古来、儒教思想の影響を受け、階層 (タテ) 関係が重視され、他者との調和を重んじる相互協調的自己観が優勢とされる日本においては、他者を尊敬することは適応上の重要な問題としてあり、感情エピソードとして頻繁に経験されてきたからこそ、「尊敬」という言葉でラベリングされカテゴリー化されるようになったという可能性を、最頻的感情という概念を用いて論じた。さらに、尊敬関連語が日本語に豊富にあることに着目し、尊敬が日本文化において、重要な概念であるために細分化して認識される、認知の精度がきわめて高い感情概念である可能性を示唆した。そこで、本稿では、現代日本文化における敬愛や憧れ、畏怖といった一群の尊敬関連感情には、おおよそ何種類の中核的カテゴリーがあるのかを同定した上で、それら個別の感情の生起要因と社会的機能を検討することを目的とし、八つの研究を実施した。本稿では、自己の役割モデルやアイデンティティ、将来の進路や目標を模索する時期であり、尊敬関連感情の経験が重要な意味を持つと考えられる青年期後期の大学生を主たる対象とした。

第 II 部 (研究 1・研究 2) では現代日本人が種々の尊敬関連語をどのように心的に概念化しているのかを、主に、曖昧な感情概念の階層的意味構造を探るプロトタイプ・アプローチに依拠して検討した。その結果、大学生を対象とした研究 1 では、尊敬関連感情の最も抽象的な上位カテゴリーとして、優れた特定人物に一貫して抱き続ける「人物焦点尊敬・感情的

態度」と、優れた特定行為に一時的に抱く「行為焦点尊敬・感情状態」の二つが見出された。また、人物焦点尊敬・感情的態度の下位には「敬愛」、「心酔」、「尊重」、「畏怖」が、行為焦点尊敬・感情状態の下位には「感心」、「驚嘆」があり、尊敬という言葉自体を含んだ「敬愛」が現代日本の大学生における尊敬のプロトタイプ（典型）的情感であり、「尊重」は感情としての典型性の低い義務尊敬である可能性が示唆された。この知見は、20—70代成人を対象とした研究2でもほぼ再現されたが、60—70代の高齢層では、一部異なる結果も得られ、尊敬関連感情の概念化には一定の世代差がある可能性も示唆された。

第Ⅱ部により尊敬関連感情の概念整理がなされたため、第Ⅲ部、第Ⅳ部では対象者を大学生に戻し、(義務尊敬と思われる「尊重」以外の)「敬愛」・「心酔」・「畏怖」・「感心」・「驚嘆」の5種類の主観的情感(気持ち)が、それぞれいかなる行為傾向や認知的評価といった、感情エピソードの他の構成要素と強く結びついているのかを詳らかにすることを主な目的とした。

第Ⅲ部(研究3)では尊敬関連感情エピソードに着目し、5種類の感情の行為傾向(特定行為への動機づけ)を検討した。その結果、尊敬関連感情は共通する複数の行為傾向レパトリーを持ちながら、たとえば「敬愛」と「心酔」は「驚嘆」に比べて相手を役割モデルに据えて追従する振る舞いを強く動機づけるなど、その動機づけの強弱に差異があることが示された。また、どの尊敬関連感情も概して、自己を是正し向上させる振る舞いを強く動機づけていたため、この自己是正・向上が日本の大学生における尊敬関連感情の中核的行為傾向である可能性が示唆された。

尊敬関連感情の発動「後」に着目した第Ⅲ部に対し、第Ⅳ部では尊敬関連感情の発動「前」に着目し、その生起要因を状況要因(研究4:先行事象;研究5:認知的評価)と個人差要因(研究6:感情特性)の二つに分けて検討した。研究4では典型的尊敬関連感情エピソード刺激を作成し、場面想定法の調査により、尊敬関連感情の典型的な先行事象(出来事や場面・状況)を検討した。その結果、5種類の感情は全て、他者の何らかの優れた性質に対する感情反応でありつつも、個別の感情の中核的先行事象には差異がある可能性が示唆された。続く研究5では尊敬関連感情の認知的評価パターン(出来事の多次元的な主観的意味づけ)を検討した。その結果、5種類の感情には共通する評価パターンと、それぞれに特徴的な評価パターンが存在することが示された。共通する評価パターンとしては、努力や意志への原因帰属と相応しさがあり、他者の卓越性の原因が努力や意志に帰属され、状況に照らして相応しいものであると評価されることが、尊敬関連感情を発生させる重要な要因である可能性が示唆された。また、才能に帰属されると発生しやすいと予想した「心酔」でも、才能に加え、努力や意志にも帰属されるという結果が得られたことから、日本人の典型的特徴の一つとされる努力主義が、尊敬関連感情の先行事象(研究4では、「敬愛」と「感心」の先行事象の一つとして「努力・熱意」というカテゴリーが得られた)のみならず、その評価チェックにおいても強く反映されている様子が見えてきた。

研究6では感情エピソードの構成要素からは離れ、特定の感情のそもそもの経験しやす

さである感情特性に着目し、尊敬関連感情の個人差を検討した。特性尊敬関連感情尺度を作成して検討した結果、感情特性としての尊敬関連感情は、特性尊敬（青年期後期の大学生にとって最も典型的な意味での尊敬の感じやすさ）、特性心酔、特性畏怖の3因子として解釈でき、他の個人差変数との関連からも多次元的特性として捉えることが妥当であることが示された。

第V部（研究7・研究8）では第IV部までの知見を基に、大学生の尊敬関連感情の社会的機能を検討した。研究7では尊敬しやすい（特性尊敬の高い）個人の帰結を検討した。その結果、特性尊敬の高い個人は、ポジティブな可能自己（将来なりたい自己像）の実現に向けて現実的に努力しやすく、主観的幸福感が高く、向社会的に振る舞いやすい可能性が示唆された。

研究8では約3ヵ月間の測定間隔で実施した2時点の短期縦断的調査により、将来なりたい職業や進路において尊敬する人物のいる大学生が、いない大学生に比べて、その分野や領域における可能自己が明確化し、その実現に向けて現実的に努力しているのか、すなわち、自己ピグマリオン過程の途上にあると言えるのかを検討した。その結果、2時点を通じて、調査1時点目において尊敬する人物がいた大学生は、いない大学生よりも可能自己が明確であり、意欲もあり、現実的な行動もしていることが示された。また、尊敬する人物がいる大学生は、自身が挙げた最も尊敬する人物に対して、普段、(Li & Fischer (2007) の感情尊敬に最も近似する)「敬愛」の感情的態度を強く抱いていることも確認された。しかし、少なくとも約3ヵ月間という測定間隔では、Li & Fischer (2007) の理論通りに、尊敬する人物に対する「敬愛」の経験頻度が相手を追従する現実的な努力をもたらし、可能自己や達成にポジティブに影響するという大きな証拠は得られず、むしろ「心酔」や「畏怖」、「感心」、感謝、羨ましさといった他の尊敬関連感情や社会的感情の相対的な経験頻度が行動を媒介し、可能自己の発達や達成に関わっている可能性が示唆された。これらのことから、自己ピグマリオン過程は、「敬愛」の感情的態度をベースにしつつ、尊敬する人物に対して経験する様々な感情状態の影響を受けながら進展していく自己発達プロセスとして捉え直したほうがよいのかもしれないと考察した。

第VI部（第10章）では八つの研究から得られた知見をまとめ、総合考察を行った。これまでの感情研究や役割モデル研究、教育心理学研究・学校教育に対する理論的示唆を行い、人の成長や発達における尊敬の機能性や、本稿全体の限界、今後の展望を述べた。